

[特別活動]

高学年のためのソーシャルスキル指導モデルの開発

ーソーシャルスキルトレーニングと学校行事を一体化させた指導が学級生活満足度に及ぼす影響ー

金子 和宏*・岩澤 利子*

1 研究の意図

(1) 問題の所在

中央教育審議会答申(平成20年)では、情報化、都市化、少子高齢化などの社会状況の変化を背景に、生活体験の不足や人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合っ解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団活動を通じた社会性の育成が不十分であるという課題をあげている。この課題を踏まえ、特別活動の改善の基本方針において、よりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力の育成が重視された。好ましい人間関係の構築にソーシャルスキル教育が有効であることは、伊佐(2002)の「全校児童を対象とした社会的スキル訓練が学級満足度に及ぼす影響」¹⁾など、最近の様々な研究や実践から明らかになっている。

筆者が担当したいくつかの学級においても、「友達関係の固定化」「仲間外し」「互いに挨拶が交わせない」「学級内で自分の意見が言えない」「大きな声で歌えない」といった人間関係の希薄さや信頼関係の欠如が要因と思われる実態が見られ、ソーシャルスキルトレーニング(以下SSTと略記)を試みてきた。しかし、人間関係に問題を抱える高学年(5年生・6年生)の学級でSSTを実施すると、「恥ずかしい」「やる意味が分からない」「めんどくさい」などの拒否反応が表れ、指導の効果が得られない場合も見られた。思春期を迎え、自我が芽生え対人感情が複雑になるこの時期の子供たちに行うSSTは、明確な目的意識や問題解決への高い意欲をもたせることが重要であると感じた。

河村(2007)は「集団生活・活動の体験に心の内面が大きく関わっている高学年では、人と深く関わる体験をもてることが大切です。」とし、「学級経営や生徒指導の中にSSTを効果的に溶かし込んで、体験学習させていく流れが必要でしょう。」²⁾と述べている。そこで、人と深く関わる集団的活動の中にSSTを意図的に位置づけ、一体化させて指導することで、高学年の子供たちに目的意識や意欲をもたせながら、社会的スキルを身に付けさせることができると考えた。

(2) 学校行事とソーシャルスキルトレーニング

学校行事は、統一した目的意識や意欲をもって人と深く関わり合いながら活動し、集団で様々な体験を展開する学習活動と言える。運動会や文化祭での学習活動が子供たちの主体性や自己指導能力の育成に効果を発揮することは土屋(2007)³⁾や渡邊(2003)⁴⁾などの研究からも明らかである。

各学校行事において、特に高学年は全校のリーダー的存在となり、学校行事を成功させなければならないという目的意識をもち、意欲的に活動を展開する。また、各活動場面で他者と密接に関わりながら活動していく場面が多い。そのため、子供たちは様々な場面において、多様な社会的スキルを発揮していくことが必要となる。

そこで、SSTを学校行事の練習や準備などの活動中に織り込んで、SSTと学校行事を一体化させた指導計画を作成・実施する。このことにより、学校行事を成功させるという明確な目的意識や高い意欲がSSTの目的意識や意欲に結びつき、高学年の子供たちにおいてもSSTの効果を得ることができると考えた。また、SSTによる社会的スキルの獲得は、良好な人間関係の構築と学校行事の成功の両面に有効に機能していくことが期待できる。

2 研究の目的

本研究の目的は、高学年の子供たちに対してSSTと学校行事を一体化させて指導を行うことが、学級満足度にどのように影響するかを検討すること。そして、高学年の子供たちが目的意識や意欲をもってSSTに取り組むことができる、ソーシャルスキル指導のモデル(高学年のためのソーシャルスキル指導モデル)を開発することにある。

* 十日町市立下条小学校

3 方法

高学年のためのソーシャルスキル指導モデルとして「SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導」と「SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導」の2つを開発し実践する。前者は6年生を対象に学年活動として2学級合同での指導を行った。後者は、5年生2学級の内、1学級を対象に実施し、実験群とした。もう一方の学級は、通常の学校行事の活動を行い、統制群とした。

(1) 実践1：SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導の実践

- ①被験者：6年1組25人，6年2組24人の計49人であった。
- ②時期：2007年9月～10月にかけて実施した。
- ③材料：SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導を実施した。
- ④測定尺度：Q-U学級生活満足度尺度（河村:2000）で測定した。

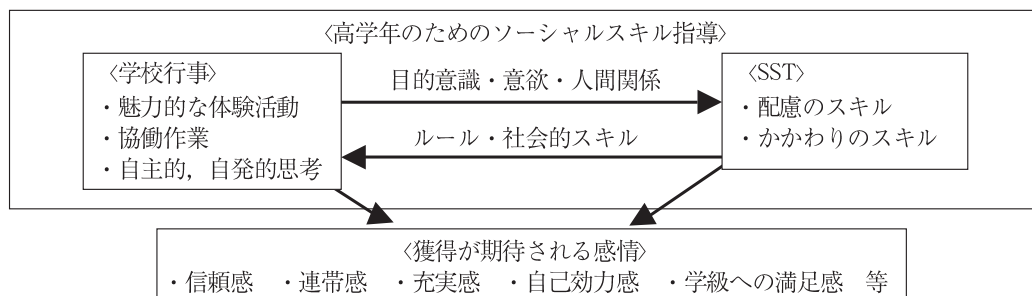
(2) 実践2：SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導の実践

- ①被験者：実験群は5年1組21人，統制群は5年2組21人であった。
- ②時期：2008年5月に実施した。
- ③材料：SSTと運動会を一体化したソーシャルスキル指導を実験群に実施した。
統制群はソーシャルスキル指導を実施しない，運動会の学校行事活動を行った。
- ④測定尺度：Q-U学級生活満足度尺度（河村:2000）で測定した。

4 高学年のためのソーシャルスキル指導モデルの内容

(1) 指導モデルの構造

高学年のためのソーシャルスキル指導モデルは，それぞれの学校行事の中で活動場面ごとに必要と思われるスキルを設定し，活動計画に織り込んでいくことで，学校行事に対する子供たちの目的意識や意欲をSSTの目的意識や意欲に結びつけていこうとするものである。その構造を図示すると下記（図1）のようになる。



【図1】高学年のためのソーシャルスキル指導モデルの構造

(2) 指導モデルの計画

① 実践1：SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導の計画

当校の文化祭は，日常の学習の発展とする学習発表を中心に，子供たちが自分を表現する機会と捉えており，各学年が総合学習をはじめ，各教科で学習した成果をステージで発表している。6年生は，総合学習で学習した縄文文化を「シュプレヒコール劇」にまとめ発表することにした。シュプレヒコール劇とは，発表児童の全員が，終始舞台上で表現する形態の児童劇である。（写真1）このため，全員が常に気を抜くことができず，協力や協調は，劇の成功に欠くことができない。

本実践では，脇（1996）の「八郎」⁵⁾を参考に，総合学習で学んだ地域の縄文時代の遺跡「野首遺跡」を題材として，子供たちと共にシュプレヒコール劇にアレンジした「野首」を発表することを学習活動の柱とした。文化祭での発表に向けた活動計画と，練習や準備などの活動中に必要と思われる社会的スキルをSSTによって習得する，ソーシャルスキル指導の計画を一体化させ，「SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導の計画」を作成した。

以下に，SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導計画の概要（表1）を示す。



【写真1】シュプレヒコール劇「野首」

【表1】SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導計画

	ミュージカル学習活動（時間）	SSTを取り入れた活動	ターゲットスキル
オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> 自分、学年を見つめる(1) シュプレヒコール「ミュージカル火焔」に挑戦するか話し合う(1) 配役決め(1) ※次の時間までに自分のセリフをできるだけ覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分や学年の様子を見つめ直し、最後の文化祭が自分の心にも、在校生の心にも残るものにするための課題を、「友達と話し合うときのスキル」を盛り込みながら話し合わせる。 シュプレヒコールについての説明をし、前時で話し合った個人や学年の課題が盛り込まれた内容であることに気付かせる。その後、「友達と話し合うときのスキル」を盛り込みながら、シュプレヒコールに挑戦するかを話し合わせる。 難しい役に挑戦しようとする友達や、なりたい役になれない友達へのかかわり方を考えさせながら、配役を話し合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手に聞こえる声で最後まで話すことができる。(かかわりのスキル) 友達が話をしているときは、最後まで聞くことができる。(配慮のスキル) みんなと同じくらい話す。(配慮のスキル) 賛成できるとき、相手を認めるときには拍手で友達の讃えることができる。(かかわりのスキル)
前期	<ul style="list-style-type: none"> 全体での台本読み合わせ(1) 歌(10曲)とセリフを合わせての練習(2) 全体練習(歌・セリフ) ↓ ↑ (3) グループ練習(セリフ) ※ここまでの間に、セリフも歌も全て暗記する。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達が頑張っていることを認めるとき、どんな言葉がけや態度をとったらよいか、また声をかけられた側の態度を盛り込みながら、台本の読み合わせや歌の練習をする。 友達が失敗したときの言葉がけや態度について盛り込みながら、全体やグループでの練習をする。その際、温かい言葉をかけることも大切だが、自分が言われていやな言葉は言わないようにすることが大切であることも確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達のいいところは、言葉で伝えることができる。(かかわりのスキル) 友達が頑張っている姿を応援することができる。(かかわりのスキル) 温かいメッセージを伝えられたら、感謝することができる。(かかわりのスキル) 友達が失敗したときには、励ましの言葉を伝えることができる。(配慮のスキル) 自分が言われて傷つく言葉は友達にも言わない。(配慮のスキル)
中期	<ul style="list-style-type: none"> 衣装、小道具づくり(1) 話し合いながら、セリフに合った動きを考える(2) グループ練習(動きを入れて) ↓ ↑ (4) 全体練習(動きを入れて) 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の役に立ちとうとするスキルや、してもらったことへの感謝の気持ちを伝えることを盛り込みながらグループごとに必要な衣装やパネル等を制作する。 これまでのSSTを思い起こす場を全体で設定した後、グループに分かれて動きを話し合いながら考えさせる。 グループで話し合った動きを全体で話し合い、組み合わせる。これまでのスキルを強化する場面とする。 衣装や小道具を使いながら練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の役に立ちそうなことをそつとできる。(配慮のスキル) 友達の気になるところを、主張的な言い方で伝えることができる。(かかわりのスキル) 同上のターゲットスキルの強化
後期	<ul style="list-style-type: none"> 5・6年合同リハーサル(1) 最終チェック(1) 文化祭当日 	<ul style="list-style-type: none"> リハーサルを目前に、うまくいったときをイメージし、どんなリアクションがあるか話し合い、うれしいときは素直に表現し、気持ちを分かち合うことが大切であることに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> うれしいときは、態度で表すことができる。(かかわりのスキル)

② 実践2：SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導の計画

当校の運動会は全校縦割り班をそれぞれ紅白の2チームに分け、主に競技の部と応援の部で競われる。縦割り班のリーダーである高学年が活動をリードし、例年様々な場面で高学年児童が活躍する姿が見られる。また、子供たちの運動会に対する意欲も高く、最も楽しみにしている行事と言ってもよい。

本実践では、通常の運動会に向けた活動の他に、運動会を学級として捉え直し、学級で何ができるか話し合っただけで決めた学級独自の活動「てるてる坊主大作戦」(写真2)も活動計画に盛り込んだ。さらに、活動中に必要と思われる社会的スキルを習得する、ソーシャルスキル指導の計画を一体化させて「SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導の計画」を作成した。

以下に、SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導計画の概要(表2)を示す。



【写真2】てるてる坊主大作戦

【表2】SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導計画

	運動会練習計画（時間）	SSTを取り入れた活動	ターゲットスキル
オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> 自分、学年を見つめる。(2) 紅白応援団決め(1) 	<ul style="list-style-type: none"> 自分や学級を見つめ直し、運動会が自分の成長や学級の友達とのかかわりを深める良い機会であることを伝える。 「友達と話し合うときのスキル」を盛り込みながら、紅白に分かれて応援団を話し合う。 進んで応援団になろうとする友達や、なりたくてもなれなかった友達へのかかわり方を話し合い実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手に聞こえる声で最後まで話すことができる。(かかわりのスキル) 友達が話をしているときは、最後まで聞くことができる。(配慮のスキル) 拍手で友達の讃えることができる。(かかわりのスキル)
前期	<ul style="list-style-type: none"> 応援練習(3) リレール練習、騎馬戦(3) 	<ul style="list-style-type: none"> 友達が頑張っていることを認めるとき、どんな言葉がけや態度をとったらよいか、また声をかけられた側の態度を話し合わせ、競技の練習をする。 友達が失敗したときの言葉がけや態度について盛り込みながら練習する。その際、自分が言われていやな言葉は言わないようにすることが大切であることも確認する。 うまくいったとき、どんなリアクションがあるか話し合い、うれしいときは素直に表現し、気持ちを分かち合うことが大切であることに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達のいいところは、言葉で伝えることができる。(かかわりのスキル) 友達が頑張っている姿を応援することができる。(かかわりのスキル) 温かいメッセージを伝えられたら、感謝の気持ちを伝えることができる。(かかわりのスキル) 友達が失敗したときには、励ましの言葉を伝えることができる。(配慮のスキル) 自分が言われて傷つく言葉は友達にも言わない。(配慮のスキル) うれしいときは、態度で表すことができる。(かかわりのスキル)

中期	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会を成功させるために全校に働きかけよう！(3)『てるてる坊主大作戦』 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会のために学級でできることを考える。「運動会当日が晴れて、みんなの願いが叶うようなお守り(てるてる坊主)を作ろう。これまでのSSTが強化される場面にする。 ・てるてる坊主づくりの中で、友達の役に立とうとするスキルや、してもらったことへの感謝の気持ちの表し方を盛り込む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の役に立ちそうなことをそっとできる。(配慮のスキル) ・友達の気になるところを、主張的な言い方で伝えることができる。(かかわりのスキル)
後期	<ul style="list-style-type: none"> ・若葉タイフーン(全校種目)(1) ・前日準備②・当日 	<ul style="list-style-type: none"> ・下学年へも今まで学習した言葉がけや態度ができるように意識付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでのSSTの強化

(3) 指導モデルにおけるSSTの基本的な展開と留意事項

① 教示

- ・行事の成功につなげるために、活動の中で必要となるスキル(ターゲットスキル)を特定する。
- ・現在の活動や自己の実態を捉えさせた上で、ターゲットスキルを学習する意義を教示する。
- ・前時での活動を想起させ、ターゲットスキルを用いた場合の利益について分かりやすく説明する。

② モデリング

- ・ターゲットスキルの良いモデルや悪いモデルを見せて、スキルの意味や具体的な展開の仕方を理解させる。
- ・活動中に見られた実際の行動をモデルとして取り上げることによって、子供たちに自分の行動を振り返らせスキル習得への目的意識や意欲を高める。
- ・実際の活動場面に立ち返り、良いモデルのまねをすることで、互いの気持ちを確認し合う。
- ・良いモデルと悪いモデルを対比させ、感想を話し合う。
- ・負のスキルは用いないことを強調し、活動の中で学習したスキルを実行していくことを確認する。

③ ロールプレイ(リハーサル)

- ・ワークシートに、学習したスキルをどのように実行していくか記入させ、般化に向けたイメージをもたせる。
- ・学習したスキルを実際の活動場面で実行することで、般化を促す。

④ 強化(フィードバック)

- ・活動中に適切な行動ができた場合などに、ほめたり、微笑んだり、注目したりして、子供の行動意欲を高める。
- ・学習したスキルが発揮された具体的な場面上げて、どのように良かったか分かるようにほめる。
- ・子供同士で認め合い、学習したスキルを実行することによって得られた感想を表現する。(話し合いやワークシートへの記述など)

⑤ 般化(定着化)

- ・学習したスキルを教室に掲示し意識させる。また、学校生活の中でことあるごとに振り返る。
- ・便りや懇談会を通じて家庭との連携を図る。また、家庭での取り組みを設定し、協力して指導に取り組む。

学習の展開においては、①～④を常に1セットにして実施するのではなく、活動後の授業終末部分に①②にふれておき、次の活動場で③を行い、活動中に④を適宜実施していく。また、必要に応じて活動中に②～④を繰り返して行う。このように、行事に向けた活動とSSTを一体化させて指導を展開していく。さらに、学習したスキルが子供の生活の中に定着するよう、⑤の内容について留意しながら指導を進める。

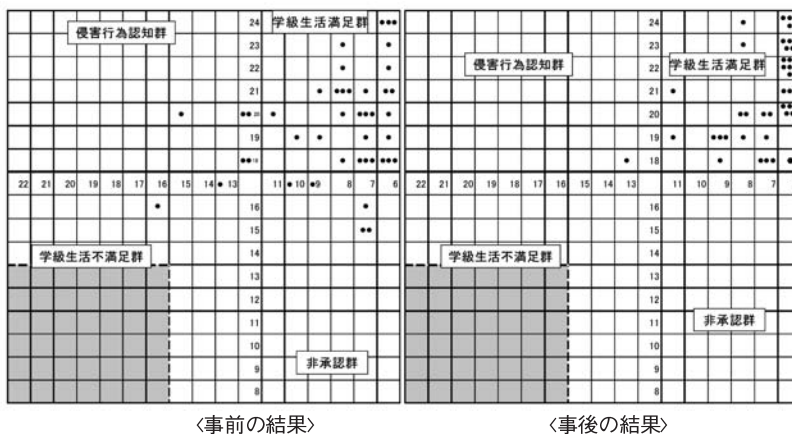
5 結果と考察

【資料1】実践1による学級生活満足度の事前・事後の結果

(1) 学級生活満足度の変化

① 実践1

(資料1)は、SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導の事前と事後の学級生活満足度尺度の測定結果である。事前調査では、学級生活満足群に位置する子は、学年の72.0%であった。また、非承認群と侵害行為認知群は11.6%、学級生活不満足群は4.6%という結果であった。しかし、事後の結果を見ると、学級生活満足群は97.6%に増加



した。また、侵害行為認知群は4.6%に減少し、非承認群と学級生活不満足群に位置する子はいなくなった。(表3)は、事前・事後調査における学級生活満足度下位尺度

【表3】事前・事後調査における学級満足度の下位尺度得点の平均と標準偏差及び効果 (F比)

N=43	事前調査得点		事後調査得点		分散分析
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	F比
承認得点	19.34	2.65	20.88	1.94	44.93** + P<.10 *P<.05 **P<.01=:ns
被侵害得点	8.25	2.54	7.04	1.62	53.77**

得点の平均と標準偏差を示したものである。結果の分析にあたっては、下位尺度ごとに事前・事後の平均を算出し、時期による一要因被験者内計画による分散分析を行った。分散分析の結果、事後の承認得点において1%水準で有意な効果 (F(1,42)=44.93, P<.01) が認められた。被侵害得点においても1%水準で有意な効果 (F(1,42)=53.77, P<.01) が認められた。

これらのことから、SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導が子供たちの学級満足度を高めたと考えることができる。また、活動計画の中に配慮のスキルとかかわりのスキルを関連させて指導したことで、承認得点、被侵害得点が共に有意に変化したと考えられる。文化祭活動と一体化させてSSTを行ったことで、子供たちにはSSTをしているという感覚はなく、むしろ、シュプレヒコール劇「野首」の練習の一貫として捉えていたと思われる。したがって、子供たちが書いたワークシートの記述には取り立ててSSTについての記述は見られない。ワークシートの記述に関する考察は後述する。

② 実践2

【表4】事前調査における実験群・統制群の学級満足度の平均と標準偏差及び効果 (F比)

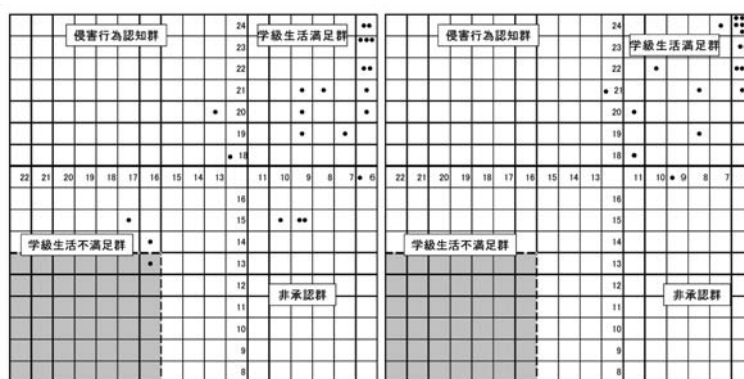
SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導においては、その効果を明確化させるため、5年生2学級の内、一方の学級を統制群

N=21	実験群事前調査得点		統制群事前調査得点		分散分析
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	F比
承認得点	19.09	2.52	20.00	3.05	1.04 ns + P<.10 *P<.05 **P<.01=:ns
被侵害得点	8.33	2.67	8.57	3.25	0.66 ns

とし、実践を行った。(表4)は、実践前の統制群と実験群の学級生活満足度下位尺度得点の平均と標準偏差を示したものである。結果の分析にあたっては、下位尺度ごとに統制群と実験群の平均を算出し、一要因被験者間計画による分散分析を行った。分析の結果、承認得点・被侵害得点共に実験群と統制群に有意な差は認められなかった。このことから、両群は等質であると判断した。

【資料2】実践2による学級生活満足度の統制群と実験群の結果

(資料2)は、実践後に行った実験群と統制群の学級生活満足度尺度の測定結果である。統制群は、学級生活満足群に位置する子が、学級の60.8%であったのに対して、実験群は90.4%と高い値を示した。また、非承認群は、統制群が17.3%に対して実験群は4.3%。侵害行為認知群は、統制群が8.6%であったのに対して実験群は4.3%であった。学級不満足群は、統制群が13.0%であったのに対して実験群は0%、つまり該当する子はいなかった。



(表5)は、実践後の統制群と実験群の学級生活満足度下位尺度得点の平均と標準偏差を示したものである。結果の分析にあたっては、下位尺度ごとに統制群と実験群の平均を算出し、一要因被験者間計画による分散分析

【表5】事後調査における実験群・統制群の学級満足度の平均と標準偏差及び効果 (F比)

N=21	実験群事後調査得点		統制群事後調査得点		分散分析
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	F比
承認得点	22.04	2.08	19.30	3.35	9.92**
被侵害得点	7.33	1.98	8.86	3.50	2.98+ + P<.10 *P<.05 **P<.01=:ns

を行った。分散分析の結果、実験群の承認得点において1%水準で有意な効果 (F(1,42)=9.92, P<.01) が認められた。被侵害得点においては10%水準で有意な傾向を示す効果 (F(1,42)=2.98, P<.10) が認められた。

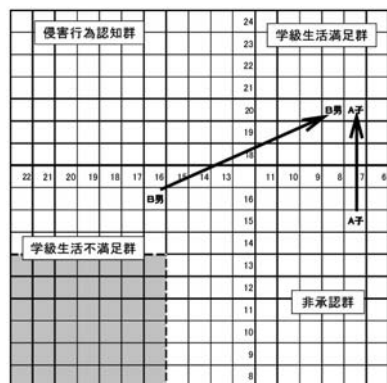
これらの結果から、実践1と同様に、SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導が学級満足度を高めたと考えられる。また、実践1では学年全体で統一した活動を行ったため、学級満足度の有意な変化がSSTによる効果なのか、単なる学校行事の活動による効果なのかがはっきりとしなかった。実践2では、統制群を設けたことで、実験群に施したSSTによる効果が明確となった。これらのことから、SSTと学校行事を一体化させた指導が、高学年の子供たちに対して有意に影響し、学級生活満足度を向上させたと考えられることができる。

(2) 抽出児の変化

実践1において、事前調査の結果、非承認群に位置したA子と学級不満足群に位置したB男を抽出し、それぞれのワークシートの記述から、SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導が子供たちにどのような効果をもたらしたのかを考察する。(資料3)はA子とB男の学級満足度調査の事前と事後の変化を表したものである。また、下記の(表6)は抽出児のワークシートの記録を前期・中期・後期からそれぞれ1日抽出し、まとめたものである。

記述からも分かるように、A子は自分の自信のなさと共に周りの友達の消極的な態度を「人任せ」と捉え、積極的な行動を目標に設定している。SSTを取り入れたシュプレヒコール劇の練習を通して、教え合い(かかわりのスキル)や、注意の仕方(配慮スキル)の向上が見られ、安心して練習に取り組めるようになったと記している。また、「みんなの気持ちが一つになってきている」と記述しているように、学年としてのまとまりが高まっていると感じている。B男については、前向きに取り組めない自分を振り返り、自主的な態度を高めることを目標としている。活動を通して、友達からほめられることの喜び(かかわりのスキル)や友達に主張的な言い方で伝えること(かかわりのスキル)を学び、活動に対する主体性や意欲を高めていったと思われる。また「みんなに見せつけるような120パーセントの力を出したい。」と高い意欲を書き記している。活動の後期には、A子と同様に、「みんなの心が一つになった」と連帯感の高まりを表現している。これらのことから、SSTが行事の成功に向けた活動の一部として捉えられることによって、高学年の子供たちが目的意識や意欲を持ってSSTに取り組み、活動を通して、良好な人間関係を築いていったと考えられる。

【資料3】抽出児の学級満足度の変化



【資料6】抽出児のワークシートの記述

	A子の記述	B男の記述
10月5日	初めて練習をやってみて、全体的に声が小さいと思った。みんなが一人一人声を出した方がいいと思う。私もそうだけど、みんなが人任せで、何を決めるのもうまくいかなかった。みんな積極性が足りないと思う。人任せにしないで積極的に頑張りたいです。	今日は声が小さくて、気持ちを曲げたり「めんどくせーなー」と思いました。でも、友達の意見に賛成すると自分も盛り上がっていくことが分かった。次は自分から声を出して、文化祭を盛り上げたいです。
10月12日	初めはセリフやパネルの動きがばらばらだったけれど、分からないところを教えあったり、違うところはみんなで見えるようになったので、今では動きがそろそろようになって、声も大きくなった。みんなの気持ちがだんだん一つになってきている感じがする。	セリフがうまく言えるようになってきて、友達からほめられた。次は大きな声で歌いたい。そして、ガラガラ声にもならないようにしたい。T男さんが、みんなに良く注意するから、みんながキリッとしてよいと思います。ほくもあまり声の出していない人には声をかけてあげてみんなを励ましたいです。
10月26日	みんなが誰か失敗しても「おい！」とか言わなくなった。分からないところは教えてもらえるので安心して練習できる。それに、今まであまり話さなかった友達に「次だよ」とか声をかけられるようになって、心がつながっていった感じがする。本番はもっとみんなの心が一つになって必ずうまくいくと思う。ガンバります。	みんなで間違ったところもカバーしあって演技してよいと思いました。みんなの心が一つになったかなーと思うくらいにうまくなったと思います。次のめあては、とにかく、みんなに見せつけるような演技をしたいです。120パーセントの力を出していきたいです。

6 まとめ

SSTと学校行事を一体化させて指導することで、高学年の子供たちが目的意識や意欲を持ってSSTに取り組むことが可能となった。さらに、学級満足度の高まりに影響したことにより、文化祭や運動会の活動が活性化し、学校行事の成功につながっていった。このような相乗効果は、子供たちの達成感や自己効力感、連帯感の獲得につながり、よりよい人間関係の構築につながっていったと考えられる。これらは、SSTによるルールの確立と学校行事活動による人間関係の構築が互いに補完し合いながら確立されていったためだと考えることができる。これらのことから、高学年のためのソーシャルスキル指導モデルとして開発した「SSTと文化祭活動を一体化したソーシャルスキル指導」と「SSTと運動会活動を一体化したソーシャルスキル指導」は一定の成果を上げたと言える。

今後は、他学年への活用や他行事への広がり、PTAや地域の活動との連携も視野に入れて実践を継続していきたい。

引用文献・参考文献

- 1) 伊佐貢一『全校児童を対象とした社会的スキル訓練が学級満足度に及ぼす影響』教育実践研究第12集, 2002, P149-154
- 2) 河村茂雄『いま子供に育てたい学級ソーシャルスキル』図書文化, 2007, P20
- 3) 土屋雅朗『児童の主体性を育てる学校行事の取り組み』教育実践研究第17集, 2007, P199-P204
- 4) 渡邊尚英『自己指導能力を高める生徒指導に関する研究』山梨県総合教育センター長期研修員研究報告書, 2003, P147-163
- 5) 脇恵『シュプレヒコール脚本集』玉川学園小学部編, 玉川大学出版部, 1996, P8-28